
SPIRIT SOUL

天奏流離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S P I R I T S O U L

【Nコード】

N 9 0 2 6 A

【作者名】

天奏流離

【あらすじ】

普通の高校生了斗が謎の少女、未麗と出逢うとき、彼を取り巻く日常と非日常の運命が速さを増して動き出す学園ファンタジー。何気無い生活に入り込む非日常。普通の学生らしい高校生ライフ。街や学校で起きる様々な出来事。初々しい恋愛。一触即発の激しいバトル。深まる謎。明かされる真実等々。小さくまとめて二人の少女とその仲間の物語。大きくすると世界に干渉する物語。彼らの歩く道を、お楽しみください。

prologue

俺達はまだ世界のことを知らない。

当然、それは俺がまだガキだからである。

だけど、そんな俺でも、他の連中が知らない世界の真実を知っている。

でも、その真実が俺に深く関わってるなんて、思いもしなかった

……

SPIRIT SOUL

スピリットソウル ー 精霊の魂 ー

：プロローグ：

まず十聖了斗じゅうせいりょうとについて説明しよう。

現在、浅葱市の県立高校の一年生。十五歳。身長は177センチ、わりと高め。性格は少々熱血な面もある。

容姿も悪くは無い。少し長めのクシャクシャ頭がトレードマーク。実はさりげなく人気があるが、彼はある部分だけ極端に鈍いため、それに気づいていない。

不良に絡まれることは無い。絡まれたとしても即行で倒すだろうが。線は細いがわりと身体能力は高く、腕力もある。

学校の成績も悪くは無く、その姿は平均的に勉強して、少し能力に恵まれた、普通の高校生である。

だが彼自身は絡まれても即行で絡んできたそいつを殴り飛ばすというおまけはついているが。

そして、彼には秘密がある。

それは、誰にも知られてはいけない秘密。

今外国へ行っている父の十聖明人じふせいめいじんも母の十聖秋子じふせいしゅこも、友人達も、その秘密を知らない。

そして、彼の秘密が、舞台の脚光に照らされるとき、

彼の戦いは始まった。

：失われた魂の嘆き：

五月一日。

十聖了斗は今現在、鮭のおにぎりを頬張りながらの学校からの帰りである。

太陽はすでに地平線の向こうへと落ち、あたりは昼間の明るい町を闇に染め姿を変えている。彼は鞆を肩に担ぎ、白いスニーカーに包まれた足で地面を蹴り飛ばし、家へと直行中である。まだ少し真新しい紺のブレザーの制服が彼が高校生になってまだ一ヶ月そこらということを確認している。

部活もやっていない彼がどうしてこんな遅くになってしまったのか。

それは図書委員の話し合いと言う学生にとってほとんど無駄でしかない行為につき合わされ、その後図書室の片づけを強制労働されたのだ。しかもなぜかそのときだけに限ってごちゃごちゃになっていたため、どさくさに紛れて同じ委員の友人は逃げ帰ってしまい、他のみんなも用事だのなんだの、結局彼一人で無駄に時間を食ってしまったのである。

「あー……腹減ったなあ」

空腹に思わず独語が溢れた。

だが彼の両親は海外へと長期出張中である。

なので自宅である一軒家に帰っても誰も迎えてはくれない。当然家事は自分でやるしかない。それが当たり前だということはわかっていても、彼も悲しいながら人間である。腹は減るし疲れもする。だから下校途中にたまに寄るコンビニにておにぎりを購入したのである。だがたった今それを胃に収めた。育ち盛りの胃袋には全然足しにならなかったが。

次の角を曲がり、そしてまっすぐ行ってからさらに右に曲がれば自

だからそこを曲がり、

彼は非日常の扉を開けた。

!?

世界に違和感を感じ、彼の目は驚愕で見開いた。その視線は気休め程度の街頭に照らされ、そして夜の闇に慣れた目が、

異形が人を粒子にして、その口にあたる部分からそれを飲み込んで、いる光景を映し出した。

その異形は、例えるのなら人と鳥を合わせたような姿の、ファンタジーに出て来る半鳥人、いや、それはすでにガーゴイルといつても差し控えない。それが人類であるはずが無い。夜の闇にくつきり浮かぶ成人男性の漆黒の体。背に生えたどんな動物にもはえることなどありえないほどの大きな双翼。両手足は異常に大きく、その指に生えたまた大きな凶悪な鉤爪。それがその存在が彼の知らない何かであるということを証明していた。

—くええええええええええ！

そして、人ではない声で鳴き声をあげた。まるで空腹に猛る我が俣な子供のように。周りの家の窓はピクリとも動かない。それがいつそう違和感を大きくした。

異形はついに了斗へと標的を向ける。

翼を大きく羽ばたかせ、風が舞う。同時に素足を大きく蹴りだす。めりっ、と言う音と共にコンクリートの一部は粉碎され、異形はとんでもない速さで了斗へと迫る。

だが、だまって飲み込まれるほど、彼は人間ができていなかった。風を切る音が、恐怖とともに彼を我に返した。同時に頭の中がパニック状態ではありえないほどに、平常時ではありえないほどに、鮮明にクリアになる。先まで彼を苦しめていた空腹感すらどこかへ飛んでいってしまった。

「げ、うおお!？」

間一髪、鞆をその辺に放り投げ、身を投げ出して避ける。風圧の音が耳元で聞こえた。とつさに転がっている体の体勢を整えると、異形はすでに狙いを定めていた。

彼はそれが残像さえ残る、人が反応してよけるものではないということに気づいていただろうか。

だがそれは同時にわずかな隙だった。放り出した鞆をついでだと言わんばかりにひっつかみ、了斗は全速力で駆け出す。

しかしすぐさま右に跳んだ。同時にすぐ横を大きな何かが過ぎ去

り、それにより生じた風圧がわずかに了斗の身体を弄んだ。だがすぐさま地に着きバランスを整える。

刹那、異形は彼に向かい凶刃を振り下ろした。

「ぐうっ！」

唸るような声を上げ、了斗は無理矢理身を捻り避ける。彼はそれが不可視の速度で人など紙くずのように引き裂くそれであるということに気づいていただろうか。

同時に捻りを利用し、異形の顔面に右拳を叩きつける。

「ぎい！？」

異形は殴られたのがありえないとも言つかの如く、悲鳴を零しわずかに仰け反る。

しかしその疑問もどうでもよくなったのか、すぐさまその腕を薙いだ。

とっさに了斗は後ろへと下がった。だが凶暴なまでの力を含んだそれを避けきることはできなかった。

声を上げることすら出来ず、了斗は五メートルほど吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。バックステップをしていなければ——もしくは他のことが要因でもあったのだろうか——確実にどこかの骨が折れていただろう。

しかしバラバラになるほどの衝撃を受けた彼の身体は、そのまま無様に重力に引かれ落ちる。それでも意識を保っているのは僥倖である。

そして、彼を喰おう（？）と、異形は彼の眼前に立った。そしてそのまま口を開き――

「――させない！」

少女の声と銃声が同時に響いた。

「ぎ――ぎぎやあああああ！？」

異形の腹には、いつの間にか三つの小さな穴が開いていた。しかしそこから血は流れず、かわりにサラサラと黒い砂らしきものがコンクリートで補強された地面に消え落ちていく。

一瞬の空白の後の異形の叫びは、悲壮に満ちていた。しかし突如として了斗の前に現れた影は、容赦など露ほど見せず、異形の額に銃弾を穿った。

同時に、異形は叫ぶのを強制終了させられ、その身は砂となり、淡い夜風とともに消えていった。

「ふう……まさか低級ランクまで襲い始めてるとはね……って君大丈夫！？」

大丈夫なわけあるか、と状況に関係なくつつこみたくなっただが、それを出来るほど体力は残っていない。必死になって立ち上がると

それだけで気を失いそうになった。

自分より頭一つ小さい少女だった。だがこの場合身長は関係なかった。問題はその容姿だ。

とても可愛い少女だ。

二重まぶたに収まる大きな瞳と、肩より長い髪は弱い街灯だけで星のように煌き、細いハーフパンツから伸びる足も、半袖のシャツから出る腕も、ガラスのように繊細で華奢で、それゆえの力強さもある。シンブルな服装がそれをさらに引き立てていた。ほとんどが闇の世界の中でも分かる肌の白さは、まさに月の光のようである。

なによりも彼女の整った顔だ。幼さを残して、ゆえにその美しさは芸術的なものへと評価をかなり上げさせている。

そういうことには全く疎い了斗にでも分かる、華麗という言葉は彼女のためと思えるような美少女だった。

しかし、その小さな手で握るものに、了斗は不審に思った。

それは二丁の銃である。少女の手に余りもせず小さすぎもせず、オートマチックのタイプに似た銀色の銃だった。余分すぎない装飾と銃身に刻まれてある白い線がその存在を引き立てる。

ついに少女は、その美しい淡紅色の唇を開く。

「ねえ大丈夫？　ねえ、その前に私の話聞こえてる？」

その見かけとは思えないほど、幼さの残る口調である。しかしそれゆえに心配している様子が簡単に分かる。

「……聞こえてる。一応だけど……」

なんとか少女の真摯な態度に応えようと、喘ぎながら了斗はなんとかこちから言葉を吐き出す。

「俺の家……そこまっすぐ行って右行つて、『十聖』って書かれてるところだから……」

聞かれてもないのに、了斗はそう言う。なぜか少女が聞きたがっていると思ったからだ。

「そつかそつか。じゃあ、あとはゆっくり眠ってていいよ……」

少女は背伸びしてその小さな手のひらを了斗の額にピタッと添える。その心地よい感じに引かれるように、了斗は意識を手放した。少女は気を失った彼を背でおぶった。華奢な体つきでは信じられないことだ。

「……急がなくちゃね……でもなんでこの人、接触して動けたんだろっ……」

少女呟きながら、彼をわずかに引きずるように歩き出した。

知らず知らず、十聖了斗は。

自分自身の手で、扉を開けた。

それは、非日常への入り口。

それは、日常へのしばしの別れ。

それは、長き道を進むための始まり。

prologue (後書き)

どうもはじめまして。天奏流離てんそうりゅうりと言います。

これから頑張って行きますので、よろしくおねがいします。

episode: first 《第一章》

——いつもどおりの日常——

——いつもの帰り道の中
のいつもと違う存在——

——闇に解けたばかりの街道——

——わずかに灯る電灯——

——そこに隠れていた、非日常——

——その中で人を取り込み、さらに牙を剥く存
在しないはずの異形——

——抗いようのない力により抵抗できない自分——

——そして——

：第一章：思わぬ再会×鍵：

「——！——」

十聖家の一軒家。その二階で斗は泥のような眠りから急速的に意識を覚醒させた。

「……は……俺の家……だよな？」

思いつきり体を起こし、薄い毛布を体から剥ぎ取る。そして思わず事実確認をする。普段は寝ぼけている頭はすでに平常時以上の思考を行っている。

体中が冷たい汗でびっしょり濡れ、寝巻きの白シャツがべっとりと張り付いて気持ち悪い。ズボンの黒ジャージも少しざらついて感じた。

しかし、これが突然の起床の直接要因ではない。だが、その前に昨日何があったか状況整理することにする。まずは落ち着くために

深呼吸する。

まず、いつもどおり学校にはちゃんと行った。いつもどおり授業を受け、いつもどおり友人たちと話しながらいつもコンビニで買う鮭とシーチキンのオニギリを計四個食べた。

「それで――」

いつもどおり少々暗い夜道を駆け抜けて――

「――！！」

そこにいつもどおりの日常がなかった。

自分の体を確かめてみる。腕、足、指、胴体、首、顔、手当たり次第触れてみる。

とりあえず五体満足であることに一安心すると同時に、疑問も湧く。

確かに自分はある異形から人が受けるとは思えないほどの攻撃を喰らったのだ。その遺恨としての痛みがあってもおかしくない。いやあつて当然のはずだ。だがしかし、今の自分の体はどこも異常がなく健康体だ。

夢？ 違う。間違いなくそう断言できる。確かにあそこで感じた恐怖も、そして――そこにいた少女に会えた感覚も、夢想のものではないと感じることができる。

――しかしあの少女はなんだったのだろうか？

雪のように白い肌。華奢な体つき。艶のある肩より長い綺麗な髪。華麗とも言えるような顔。そして——異形を貫いたオートマチックのような銀銃。

彼女が自分をここまで連れてきたのだろうか。あの細い体で自分をここまで運んでくれたのだろうか。確かに自分の体重は平均より中々低い。しかしそれでも彼女に抱えられるとは思えなかった。

それに彼女はどうして異形を消滅させることができたのだろうか。

……いや、ここから先の詮索はやめよう。

ここから先は自分なんか考えてはいけない。自分が居る日常と、あちら側の非日常。この絶対的な壁があるかぎり、自分はただの住人。何もできることはない。

二つあるうち、ベッドの頭側にある窓際。そこにおいてある目覚ましの鳴っていないよくあるタイプのアナログ時計に目を向ける。六時ジャスト。普段セットしている時間より四十分早い。しかし到底二度寝できるような気分ではない。

布団を跳ね上げ、一旦自室を見渡す。壁際の本棚には漫画や小説が多々入っている。もう一つの、本棚の隣にある机。強化書類はテスト一ヶ月前にでもしかもって帰らないので学校におきっぱなしだ。ノート類とその他しか入れられてない鞆。

もう一つの窓から、カーテンの遮りを突破したわずかに木漏れ日がキラキラしていた。

わりと清潔を保った、自分の部屋。

ここから、自分の日常が始まる。

すっかり慣れた手つきで作ったベーコンエッグと茶漬けを朝飯として胃に詰め込み、少し早めに家をでる。鍵を閉め、鞆の外ポケットに詰め込む。そのまま紺のブレザーを翻し、少し早足で駆ける。頭の片隅でそろそろ買出し行かないと思う。予算は親が向こう（海外）で仕事を成功させているのか、余分に送ってくれるため心配ない。

この浅葱市は、住宅街と商店街のほかに、通称『ビル街』という隔たりを、住宅↓ビル↓商店という感じを大きめの川と橋で分けられている。

了斗の通う学校、県立浅葱高校、通称『浅高』は、三年前にビル街付近にできたばかりの新設校である。だがわりと他の県や市からの学生が来るため、『出会い』とやらを求める学生にとっては格好の学園である。

失礼、説明が横にそれた。

学校は四階建て。A側とB側に分けられ、一つの学年四クラス、一クラス四十人前後で収まる、普通の学校である。

町の総規模は、田舎と都会の中間という中途半端。

ここが、この物語の中心である。

「おい、起きろよ」

六時五十分頃には着いていた了斗はA側の四階にある一年A組の教室についた後、そのまま思い出した眠気に引きずられるように机につつぷしていたのだ。

そして友人の声に引き上げられるように、唸り声を上げながら顔を上げる。そしてデジタルの腕時計に目を向ける。七時四十分。ずいぶん寝こけていたようだ。そしてこの時間帯は遅刻要員以外の生徒なら大抵来ているころだ。

「なんて声だしてんだよ」

わりと軽い声の主に視線を向ける。ブレザーの前のボタンをあけ、少し軽い雰囲気友人に視線を向ける。

肩に掛かる髪を茶に染めた、わりとモテそうな感じの少年。彼がこの高校に入ってから友人、篠原しのはら 誠弥せいやだ。

「るせえ、なんで遅刻常習犯のくせにこの時間に来てるんだよ」

実は誠弥は、中々の遅刻常習犯なのである。

別に寝ぼすけというわけではない。むしろ起床は早すぎるほどだ。しかしその時間帯にいろいろ遊びに行くらしく、気づけば遅刻、というパターンなのだ。しかし別に過度にルーズという訳でなく、わりとちゃんと考えて行動する上に勉強も了斗と負けず劣らずなので、先生一同も意外と温かい目で見ているのだ。

「まあ、その理由もわからないではないけどね」

「あ、例の事件のことでしょ」

「そうそう、おっかないのなんのって」

続いて二人の男女が来て、誠弥が相づちを打つ。一人は横長の眼鏡をかけた、少しハネ気味の黒髪を持つ、どこか委員長タイプの少年——事実そうなのだが——。少女のほうは活発・好奇心旺盛そうな印象のポニーテールだ。

少年は了斗の中学以来の友人、立倉 圭。たちくら けい少女は誠弥と同じく高校生になってからの友人、中山 起衣璃である。なかやま きいり

あと一人加えたら、クラスでいろいろと分かれている仲良しグループの勢ぞろいである。

「あ、皆さんそろってますね」

律儀な敬語を使いながら残りの一人も来た。セミロングに伸ばした、染めたわけでもない少し色素の薄い髪。そしておとなしくおっとりした雰囲気を持つ少女、平崎 香。ひらさき かおり彼女も誠弥や起衣璃と同じく高校時代に入ってから友人である。

「事件ってなんだ？」

「おいおい了斗。お前今日のテレビ見てないのかよ」

「いやーまあ、今日はとりあえずいいやみたいな感じでさ」

そんな了斗に呆れる誠弥。実はこのグループでは全員名前で呼び合うことにしている。別に確固した規律ではなく、了斗が

「十聖ってなんか呼びにくいから、名前で呼んでいいよ」

と言ったのが始まりでそうになっている。そのせいか、特に了斗はクラスほぼ全員に名前で呼ばれている。

歴史の長い友人らしく、圭は了斗に説明する。

「謎の行方不明事件だよ了斗。何年か前から取り上げられてるだろう？」

圭の言う事件とは説明すればこういったものである。

反抗時刻は主に夜。

年齢は老若男女問わず。

一言で言えば、消えるのである。

誰も見ていない、というより見ていた人までもが消えているのである。そしてどういふことか、必ず戻ってくる。しかし戻ってきた人には酷似する点がなく、無差別なのだ。そして二つのパターンがあり、普通にいる人と、無気力に数ヶ月で様々なパターン——事故や病気、はたまた自殺——で亡くなってしまふ人。分かることといたら、行方不明の期間中のことを誰も覚えていないということだけである。専門家は、テロだ、狂気犯罪だ、エイリアンだとか無意味な議論をテレビという衛星装置の向こう側で交わしている。

ああ、あの事件のことか。了斗は納得して——

「! !」

本日三度目の驚愕。

「どうしたの、了斗君？」

不思議そうに香が顔を覗き込む。

「い、いや、なんでもないよ」

少しうつろたえながら了斗は答える。そう？ と香は首を傾げる。

「どうせ、熟睡してる中悪い夢でも見たんじゃない？」

「はは、そんなとこ」

「冗談っぽく笑う起衣璃。それに苦笑してみせる了斗。そして、

「あ、そろそろHRじゃなか」

という誠弥の言葉で、軽く別れを交わしそれぞれの机へと戻っていく。ちなみに了斗は窓際の後ろから三番目、中途半端に隣が空席である。誠弥は廊下側の一番後ろ。その左隣に起衣璃。圭は窓際から

横三つ、前から三番目。香は窓際から横二つ、一番後ろである。

頭に手を当て、軽く思考にふける。

そうか、俺はあの事件の真相に遭遇してしまったのだ。そしてもう少して行方不明者の一覧の中に名を連ねるところだったのだ。そう考えると体が少し震えた。

しかし、異形はあの時あの少女がやつつけたのだ。これならもう行方不明者が出ることは――

――？

疑問が湧く。今までの事件では多少の差があれど、そこには警察官がいるのだ。しかし自分が襲われた現場には警察官どころか犬一匹いなかった。

もし自分が襲われたところに警察が来てたら『お前大丈夫だったか』とくらい友人達が聞くだらう。つまり出される結論は――

――異形はほかにも存在しているってこと……？

――考えすぎだ！！

もしかしたら別の場所を襲ってから自分のところに来たのかもしれない。そうに違いない。否、そう思いたかった。

……仮に、他に異形がいたとしてもあの少女がなんとかしてくれる。少女に頼る自分を情けなく感じた。しかしそう思うことでしか思考を中断することしかできなかった。

しかし——あの少女はいつたい何者なのであろうか。朝やめたはずの詮索を再び再開する。

自分と同じ年くらいだ。が、あんな美少女は商店街でも住宅街でも見たことがない。それならば絶対に印象が残っているはず。

それに学校にも通っているはずだ。だったら噂くらいするだろう。

——また会えるかな？

彼女に会いたがっている自分に少しばかり驚くと同時に、納得もしていた。あんな異形を倒すのだ。少しは興味がでる。そして、言いたいこともある。

その願いは近すぎる未来に実現する。

例えばそう——いま教師が開いたドアの向こうとか。

教師の名は前梨^{まえなし}隆^{たかし}という、生徒からの人気も中々高い若い教師だ。四角い縁の眼鏡がトレードマーク。

その人気の理由は、優しさと厳しさがキツパリと分かれて、授業もつまみ。さらに冗談もつまみといった絵に書いたような先生。担当授業は国語。“教師”という権力だけを振り回すだけのそれ、はつきり言う理由もなく教師になった無能者とは大違いである。

起立、礼。といったお決まりを終え、めったにない連絡事項に入る。その間生徒達はザワザワと話し始める。だが前梨がその初めか

らいつもとちがう雰囲気をもっているのに了斗は気づいた。

「いきなりだが、今日は転校生を紹介する」

まじめそうな言葉をそこで切り、今度はニヤリと笑い、テンションをあげる。

「男子ども期待するがいい！！ 転校生は女子だ！！ しかも中々のそれだ！！」

これが人気の理由だなと心の片隅で思いながら、了斗は男子の歓声を聞く。女子のほうは曖昧な笑いをしている。

そして、転校生は来た。

彼女が入ってきた瞬間、教室は感嘆に溢れた。もしくは声もでない者もいた。

「おい、すっげえ可愛いじゃんか」

「ああ、告って見ようかな」

「無理だつて。お前じゃ」

「ホント可愛い」

「うちのグループに入ってくれるかなあ」

「あの娘しだいだよ」

「はあ……」

「あのルックスはうらやましいね」

並人よりは、はるかに鋭い感覚を持ち、ざわめきの言葉を一つ一つ判別しながらも了斗も声がでなかった。いや、それはクラスメイ
トとは違う種類の驚きだった。

星のような、よく見ると夜空の色そのものの青い髪。パツチリした二重の目。シンプル派の制服を着こなした華奢な体。そして前梨の演説のせいと転校生特有の緊張感のせいで頬をわずかに染めているが、それだけであの美少女を見間違えるはずもない。

昨日の異形を倒した少女ではないか。

——おい、こんなこと現実にあることなのかあああ！？

半ば思考が半壊するのを必死に押し留めた。そうだ、彼女ではない。よく世界に三人くらいは自分にそっくりな人間がいるって言うじゃないか。きっとそれだ。

すっかり『彼女』と認識したくせに多少現実を無視した思考をあうる了斗にに気づく者は存在せず、少女は幼さの残る声で自己紹介を始める。

そんな了斗に気づかず、少女は自己紹介を始めた。

「蒼蘭 そつらん 未麗 みれいです。よろしくお願ひします」

幼さの残る声で挨拶し、ペコリと律儀にお辞儀する姿に高感度は

かなりアップする。

前梨が何かを説明しているが、了斗は現実を拒否するのに忙しく耳に入らない。しかしその拒否にも限界が来た。

一度教室を、これからクラスメイトを見渡していた彼女――
未麗が、自分を見た瞬間、

驚きの張り付いた表情が一瞬見えた。

その瞬間、彼女はあのよるにあった彼女であるということがいやでも判明させられた。

「席は、そうだな。十聖の隣が空いてるな。そこに座りなさい」

こんな都合のいい展開があっていいのかと呼べるような感覚が体に染み渡る。

周りの男子から

「うらやましいぞ、了斗」

というような空気が漂う。

「よろしく、十聖君」

「ああ、よろしく」

「なんとか“お互いに”挨拶を交わすことができたことに、“両者は安心した。”

「ふへー。なんかのんびりいい感じだ」

あつという間に昼休み。授業は聞いてなかったがノートはとったのであとで復習すれば大丈夫。

いつもだったら了斗は圭達と教室で昼食をするのだが、今回は断って屋上に来たのだ。普段から屋上は開放されているが、まだ肌寒い風なので来る人はまずいない。

朝から働きっぱなしの頭を冷やすにはちょうどよかった。四つのオニギリを平らげ、肩ほどの高さの柵に寄りかかり空を眺めのんびりする。

別に教室で食べるのがいまさら嫌になったわけではない。

あの少女が来た波紋が別のクラスにも及んだ。ほとんど学年全員がクラスを見に来たし、彼女の周りにはドーナツ化現象が発生していた。我が人生で本当にそれを目の当たりにするとは思いもしなかったゆえ、感心さえしてしまった。

その中に雑じるのも悪くないが、それを止めるだけの理由が了斗のなかにあった。

大きく分けると二つ。彼女が故意に自分を意識している。妙にそれが気になったからだ。

もう一つは、彼女は非日常の入り口そのものだからだ。

彼女に昨日のことを聞きだしてしまつては、他の人に聴かれる可能性もある上に、今ある自分の日常に別れを告げなくてはならないかもしれない。それに、彼女を扉と例えるならば、自分はそれを開く鍵を持っていない。

―ガチャ。

鉄製の古い扉が開く音がした。

こんなときに来る変わり者がいるもんだな―と、自分も変わり者として加えながら、そこに視線を向ける。

「うはっ！ やっぱちょっと寒いな」

蒼蘭 未麗がそこにいた。

幼さの残る声ははしゃぐような響きで、他の女子同様短いスカートを軽く抑えながらニコニコと笑う。星空のような青い髪は風に流れるようになびく。

「あつ、十聖君」

そして、ようやくそこで斗に気づく。

「こんなところにくるなんて、よっぱど暇だったんだな」

少しぞんざいな感じで言葉を投げ掛ける。微笑も加えてるので好意的なのは相手にも伝わっているのか、向こうもニコニコ表情のまま「十聖君もじゃん」と返す。

「でも、転校生っただけであんなに来るとは思わなかったな」

それは君自身の容姿のせいだろう、と心中でつつこみを加える了斗。彼女のさりげなく天然な面が垣間見えた気がした。

「だから、なんとか抜け出して、ここに来たんだよね」

「なんで、ここ？」

「こういう気候のとき、あんまり屋上には人がいないと思ってさ」

無駄のない動作の歩きをしながら、未麗は了斗の隣の柵に寄りかかる。彼女はちょうど頭一つ分ほど小さかった。あまり男子との距離を意識しない性格なのだろう。そのほうが自分も関わりやすい。

「そっか……」

そのまま、三十秒ほど時間が流れ、
ついに了斗は切り出した。

「あのさ……昨日の夜のあれってさ」

少しだけ、未麗の持つ雰囲気が変わった気がしたが、構わず了斗は言う。

「ありがとうな」

「？」

呆けた表情になった未麗に、顔を向ける。

「いやさ、あの怪物から助けてくれたんだ。だからお礼が言いたくて」

少し照れくさそうに髪をかき回す了斗に、未麗は了斗の前に立ち位置を変える。それを見て了斗は柵に寄りかかるのを止め、しっかりと立つ。

「……知ろうとはしないの？」

心底不思議そうに、未麗は聞いた。それは昨日自分が『異形と戦った人物』という別の言い方の肯定であった。

「いや、俺が知ってどうこうなる問題じゃないし、君がそんなことをしているってことはそれなりの事情があることは分かる。勝手に首を突っ込んでいい問題じゃないってことは、わかる」

そこで一旦言葉を切り、改めて言う。

「だから、俺にはこれを言うしかない。ありがとってさ」

きつと朝のもやもやは、これが言えなかったからだろうと心の片隅で思う。

その真っ直ぐな言葉に、呆けたままの未麗は思わずそれに対する返事を送った。

「ど、どういたしまして？」

「ああ」

そのあどけない言い方が少しおもしろかったか、思わず了斗は吹

き出してしまふ。抑えた笑い声に未麗はようやく我を取り戻し、頬をふくらます。

「むー、ひどいじゃん笑うなんてさ！」

「あはは、ごめんごめん。なんかおかしくなつてさ」

その笑いを浮かべながらの謝罪に、怒っている自分さえおもしろく感じ、頬を元に戻し、軽くフツ、と笑みをこぼす。

それは傍から見れば、冗談を言い合う歴史の長い友人か、愛人同士にしか見えないことに二人は気づかなかった。

「さて、まだちょっと時間はあるけど教室に戻るよ。少し一人でいたいだろうしさ。んじゃ、また後で」

ようやく笑いを押し込み、了斗は未麗の隣をすれちがいドアに向かう。

ドアに触れた瞬間、未麗の小さな言葉が耳に入り、それを止めた。

「本当にいいの？」

それを聞いた途端、体は勝手に動き、彼女と向かい合うように振り替える。

「貴方は、私達側の世界に入る鍵を持っている。そのための扉の鍵穴——私も見つけてる。そして関わる権利を持っている」

真剣な表情で、未麗は了斗に近づく。幼いはずの声は酷く大人びて聞こえた。

そして、五歩ほどの差のところで止まり、言葉を続ける。

「それに、遅かれ早かれ貴方は巻き込まれる運命にあった。それに、貴方の言う怪物はこれからも貴方を襲う。なぜなら貴方を見つけたから」

——少女は問う。

「貴方に、私に関わる勇氣はある？」

——少年は答える。

「……勇氣はない。だけど、俺にできることがあるなら、俺は君に関わる」

——風が、強く吹いた。

episode: first 第二章 (前書き)

今回はセリフを多めに見ました。

だけどその分描写がうまくできてないかもしれません (苦笑)。

episode: first 第二章

——貴方は、一人なのに誰かに助けられていると思うときはありますか？

——その正体をつかめなくて、それを“自分の力”と考え直していませんか？

——でも、“彼女達”が知っている正体は、それを望んでいるのかもしれない。

——だけど、たまには自分の味方に感謝してみるのも、そんなに悪くはありませんよ。

・第二章：スピリットマスター×スピリットオーラ×スピリットソウル：

この学校の昼休みの制限時間は五十分。始まってから十分ほど経

ったところだ。

学校の屋上には小さめの避雷針や給水タンクがあり、まだ黒いめつきが剥がれていない柵は肩ほどのもので寄り掛かるのに最適である。ちょうど雲が太陽を覆ったので、五月の涼しさが肌寒く感じた。

そこに、少年と少女——了斗と未麗が空を眺めていた。二人の頭一つ分の身長差がよく分かった。それはとても穏やかに見えて、とてもこれから世界に干渉する話をするなんて思えない。とても了斗が覚悟しているなんて思えない。

長い髪をなびかせながら、未麗が口を開いた。

「たまに、幽霊とか妖怪とかって聞くことあるでしょ？ でも、それの名前は幽霊でも妖怪でもないの。それはいろいろな生命が持つ想いの負の部分や正の部分が現している“ある存在”なの」

まるで物語を語るように、彼女の言葉は続いていった。それに了斗にはどこか神秘的な雰囲気伝わった。

「その正体は——精霊なの。精霊は、全体的に言う这世界全体と干渉する、根源そのもの」

「つまり、それは俺達がこの世界に存在できる本当の理由がそれなんだな」

コクリと、軽く頷く。未麗にとって、すぐに理解、納得してくれる了斗とはとても話しやすかった。

「その根本的なエネルギーが“精霊気”^{スピリットオーラ}。これが生命の生きるための力。精霊気の総量よって寿命が確立されるの」

「……なるほど」

「んで、それを使って、身体能力を向上させたりいろいろな魔法みたいなのを使ったり、武器を生成したり“ある所”に適応できるようにして“あれ”と戦うのが――」

大切な言葉を吐き出すために、一度言葉を切る。

「私達^{スピリットマスター}“精霊士”」

「達ってことは、お前だけじゃないんだな」

「うん、所々に支部があつてどこかに本部があつて、普通の人や私と同じ精霊士がサポートしてくれてたりする」

「……普通と違うのか？ それに、精霊気ってようは命の燃料だろ？ 何度も闘ってたらすぐに死んじゃうんじゃないか？」

少しずつ現実離れしているなと頭の隅で考えた。だがそうじゃないとすぐに気づく。ただ“こちら”の現実に慣れすぎているだけで、“あちら”の現実にたった今触れているのだ。そう理解する。

理解したが、それが日常と非日常という隔たりがあることは変わらなかったが。

そんな了斗の葛藤に気づかず、未麗は続ける。

「そうじゃないの。精霊士は、“あるもの”を生まれ持っているの。それのおかげで闘える」

「あるもの？」

「それはどう覚醒するか分からない。唯一分かっている方法は精霊士に別の意味で接触しないと目覚めないこと。でも、持っているだけでは奴ら——“ロストスピリッツ”に喰われる」

「……その“あるもの”について話す前に、そのロストスピリッツについて教えてくれ」

昨晚の恐怖を急に思い出しつつ、彼はわずかに身震いしながら聞いた。

「ロストスピリッツは、負の精霊気の結晶。それがどう生まれてるのかは不明。でもそれは人の精霊気を喰らう。なぜ人なのかは、人

がこの世で一番精霊気を持っているから。主な活動時間は太陽が沈んでからの闇……闘っている相手にしては謎の多い怪物よ」

「……殺すのか？」

「間接的にってことになるの。奴らは本能で精霊気をわずかに残し、失踪した場所に戻す——“リバー”するの。でも、その人はすぐに死んでしまう」

「……だから失踪していた人は……」

「私たちの言う“失踪”は、奴らに喰われたと思ったほうがいいわ」

「喰われた人は……もう助けられないのか？」

恐怖を覚え、彼は恐る恐る聞いた。もし自分が、いや自分よりも友達が、両親が食われたら、もうその時点で終わりなのだろうか。

「いいえ、ロストスピリッツは、生きるためにそれをゆつくりと消化していくの。そのロストスピリッツを倒して、その後でまだ奴らの意思でリバー”スされていない人達は強制リバー”スされる」

「でも、精霊気が尽きかけてる人は……」

「ううん、それはロストスピリッツを倒した後に散らばる精霊気を与えて個々の精霊気を喰われる寸前の数値に注入するの。それで足りなかったら、私達が追加するの」

なんか少し気持ち悪く感じた。

「なんかそれって気持ち悪くないか？ 負の精霊氣を与えるなんてさ。それに俺も喰われたことがあるのか？」

「命って言う源がない精霊氣は正でも負でもないの。だからそれを人の精霊氣に“^{コンバート}転換”して注入するの。それに、君は喰われていない」

「なんで？」

と了斗は不審に思いながら聞き返した。

「食われたら、君の場合その時点で死んでしまっているから」

同時に、冷や汗と疑問が湧き上がった。

「え……！？ なんでだよ。別に喰われていたとしても、精霊士が精霊氣を俺の標準値に戻しているんだろー！？」

「その答えは、今から話すことに含まれている」

幼さの残る顔だと忘れさせるほどの真剣な表情を見て、了斗は、頼むと促した。

「……だれでも精霊士だというわけじゃないの。精霊の気まぐれで、個々の元素を持つそれを宿した人間だけが成れるの」

そして、彼はついに根源を知った。

「それが精霊気の結晶であり、精霊士の力の源——それが、
スピリットソウル
精霊魂”」

「スピリット……ソウル……？」

その言葉に、了斗は思わず呟いた。意味も知らないのに、それは大きな言葉だと思ったからだ。

「うん。闘うためだけじゃなく、その寿命を延ばしたり、治癒力を上げたり、自分の属性の元素を操れたり……いろいろなことが、“自分”の精霊魂の許容範囲でできるの」

「そして……闘うための精霊気を生み出す……」

「そのとおり」

と、未麗は頷いた。

「だから、私達は精霊気の使って死ぬことはない……使いすぎでは分らないけど、ね」

苦笑するように、未麗ははにかんだ。

「かわりに、ロストスピリッツに喰われて助かることはない。精霊魂は奴らの好物だから、完全に取り込まれてしまう」

その苦笑に影があることに了斗は気づいた。だから、なぜ君みたいな女の子がそんなことをするのか、他の人はどのような理由で闘っているのかと聞くのはやめた。躊躇われた。

「最後に、ロストスピリッツは精霊気を吸収することにより進化する。それはランクで分けられて、C1〜C10が低級、B1〜B10が中級、A1〜A10が上級って分けられる。B3に入ったら自我を持つようになって、A1になると多少なら昼でも動ける。それに強さも格段に増す」

「これで、基本話は終わり」といい、少しお茶らせて見せた。

……かなり大きな話で、それが彼女らにとっては基本だということに驚いた。自分がとんでもないことに首をつっこんでいることがわかった。

「……なんで、俺にそんなことを話したんだ？」

「……落ち着いて聞いてね」

彼女は深刻な表情をした。

「貴方にも、精霊魂が宿っているの」

思考がスコンと抜け落ちた気がした。しかしすぐさま我を取り戻す。

「え……なんで俺にまで!？」

「だって君は、彼らの付近によっても動けたんだもん」

「な……それ、どういうことだよ」

「ロストスピリッツがその場に顕現すると、その意志によってある領域が広がって人の動きを止めるの。それが“混沌領域”カオスフィールドこれは私達でも広げられる。その中を君は動いていた。その中で動けるのはロストスピリッツと私達精霊士。そして精霊魂を持っている“適^アダプター^{ダプター}合者”しか行動できない」

「それってつまり……」

愕然としたと同時に、心のどこかで納得している自分がいた。

「そう、君も精霊士になることが出来る。でも、それを選ぶのは君自身だよ」

「……闘つても逃げるも、俺しだいかな……」

「うん、逃げても怒らないから安心して。今の精霊士は意思のある

人しか闘っていないから」

……考えさせてくれと、了斗は空を見上げた。その澄んだ空を見ても、今知ったばかりの真実は心の中でリピートされていた。

「……だから、聞こえたのかな」

「うえ、何が？」

しばらくは空を見上げたままだと思っていた未麗は、知らず知らず呟いた了斗の言葉に少しばかり驚いた。

「……子供のころからさ、何かのを感じていたんだ。これのおかげで自分の危険を避けたこともあるし、人を少し助けたこともある、赤点寸前のテストも、分かんないはずの答えも分かったんだ」

「……………？」

「集中すると自然に聞こえて……子供のころの俺でさえそれが“普通”じゃないって分かった。だから親にさえ話さず、ずっとそのままだったんだ」

了斗は、自然とその声に助けられたことを思い出した。

小学五年のころ、自転車で友達の家からまだ親のいた家に帰る途中、“声”を感じて青信号の横断歩道前で急ブレーキを掛けた。そ

の数瞬あとに、大型トラックが唸りを上げて信号も交通ルールもぶつ飛ばして行つたのだ。後に聞いた話だとそれは飲酒運転で、人を轢く前に逮捕となつたそう。もしかしたら白紙の犠牲者リストに自分の名前が載つてたかもしれないと思ひ冷や冷やした。

中学三年のころ、のんびりと学校から帰宅するため住宅街とビル街の狭間である橋、神楽橋を渡っている途中、“声”に導かれるままに橋の影に降りてみると、高校二年辺りの五人の不良が同じ年くらい少女を囲んでいたのである。

それを見た了斗は躊躇いもせず飛び蹴りで一人を川に落とし、啞然としている間に残つた全員も渾身の力で川へとダイブさせたあと、相手に顔を覚えさせないように彼女を引っ張つて逃げた。そして逃がして自分も逃げた。あの不良はかなりの問題行動が目立っていたようで、またどこかで悪さをして捕まつたということを知った。

高校一年のころ、最近のことだが、実力テストで苦手な数学で一番苦手な図形分野が半分以上を占めており、赤点を取り入学早々補習という危機に冷や汗が流れた時に“声”が聞こえた。その瞬間記憶の中の奥深くに封じ込められたその公式が浮かび上がり、赤点どころか九十点以上を取ってしまったのだ。

その“声”は、自分が意識的・無意識的なんてものは関係なく、集中した時に現れる。聞こえる確立は五分五分。それが聞こえたからといって集中が乱れることはない――

――ということ、未麗に話した。彼女が真実を話してくれたせいか、わりと饒舌に話すことが出来た。

「……うん、確かにそれは精霊魂を持っている証だわ」

というわずかな間に、彼女はわずかに葛藤した。

――彼も闘わせなきゃいけないのだろうか？――――そんな――

声”の例なんて聞いたことがない、と。

そういった声が聞こえる例はよく聞く。しかしそれは適合者の意志とは関係なく起こっているのだ。どんなに集中しても、確立が五分五分とはいえ自らの意志で聞くことが出来るなんて例は聞いたことがない。

「……君は、闘うの？ 日常に身を置くの？」

その疑問は頭の奥に押し込めつつ、未麗は問う。それに対して了斗はクシャクシャの髪を掻きながら答えた。

「……今はまだ分からない。とりあえず考えさせてくれ。そんなに簡単に決められるものじゃないから」

「……そっか」

二人は、非日常についての話題が終えたことを暗に感じた。その空気の中、彼女は少し背伸びをした。

「十聖君ってさ、部活とかやってる？」

いきなりの日常の質問に、了斗は驚きながら答える。

「いや、あんまり身に入りそうにないからさ。それに友達とバンド組んでるし」

「え、それホント!？」

瞳をキラキラさせながら未麗は聞き返す。

「ああ、俺の友達でやってて、ボーカル兼ギターが一人。ギター、ベース、ドラムが一人ずつ」

「十聖君は？」

「ギター兼ボーカル」

苦笑しながら答える了斗に、瞳の輝きを増しながら未麗は、すごいなと憧れの視線を向けた。

しかし了斗は彼女のその瞳に、どこか寂しさを感じた。

そのとき、昼休みの終焉を告げるチャイムが鳴った。

「あ、終わりだね。いこっか」

「ああ……あ、そうだ」

柵から放たれるように離れた未麗に、了斗は呼び止めた。

「よかつたらさ、俺の友達のグループに入らないか？」

「え？ この学校ってグループで分かれてるの？」

「いや、とりあえず一番話す相手と、勝手に作られてるんだ。だからといって別のグループと話しちゃいけないって訳じゃない」

どうする？ と、微笑気味に了斗は聞いた。うーんと宙を見上げて考えた結果、

「いいよー。十聖君の友達なら馴染みやすそうだし」

「そうかー。まあ、多分そうなんじゃないかな？俺から言っとくよ」

あいつら喜ぶかな？ と思っっているなか、未麗が聞き返してきた。

「バンドのメンバーさんって、全員そのグループに居るの？」

「いや、ドラムの奴だけ放浪野郎だからさ。だから友達になれたって所もあるけど」

「そっか。じゃあ、いこつか十聖君」

「……あ」

そこで、ふと彼女が自分を名字で呼んでいることに気づいた。

「こっちのグループじゃさ、相手を名前で呼ぶことになってるんだ。だから、俺のことは了斗でいいよ。十聖じゃたまにかむからさ」

「そうなんだ……じゃあ改めて、よろしくね了斗君」

「ああ、こちらこそな。未麗」

非日常以外で、ちゃんとした日常の絆が出来たことに、お互いに喜びを感じて、握手を交わした。

小さい手だなと了斗は思った。見掛けより大きな手だなと未麗は思った。

* * *

「あ、戻ってきた——」

長めの茶髪を揺らしながら誠弥が了斗を見つけるが、隣に居る少女、未麗を見て固まった。他の“五人”も同様な反応だ。そして他のクラスメイトもザワザワとし始めた。

「んー、どうしたの？」

現状の分からない了斗は、未麗の代わりに質問し返す。が、それが返ってくることはなく、代わりにいつの間にか追加されているもう一人に声をかける。

「おー公貴、暇つぶしにでも着たか？」

「あ、ああ。一応お前の経過も聞きたかったしな」

と、了斗はグループに入っていないものの（その内誘おうと思っている）、微妙に動揺している親しい友人に声をかける。その少年はスポーツ系の短髪で、少し切れ目気味の瞳を持っている。彼が瀬之立 公貴（せのたち こうき）である。

ちなみに先に言った通り、了斗がボーカル兼ギター。誠弥がギター。圭がベース、そしてドラムの公貴という四人構成のバンドだ。バンド名は『Long Route』。今見える長い道をあきらめないで歩きたいという意味合いがこもっている。

「ああ……まあ、ボチボチだな」

「つまりもう少してことだな。まあ、頑張れよ」

頭を掻きながら苦笑する了斗に公貴は軽く肘鉄でつつく。それは初めて見る未麗でさえ

「親しいんだな」

と納得させられた。

そして経過を聞いた公貴は、じゃな！ と颯爽と教室を出て行ってしまった。

「……経過って？」

「ああ、歌詞作りのことだよ。俺が担当しててさ。結構悪戦苦闘中」

あはは、と曖昧に笑いながら未麗に教える了斗を見て、

「……どうなってんの、了斗？」

誠弥が動揺気味に質問する。が、

「あ、はじめまして。蒼蘭 未麗です」

唐突なる自己紹介に面食らった。

「あ、ああ。よろしく。俺は篠原 誠弥」

「僕は立倉 圭。よろしく」

すぐに平常状態に戻った誠弥と、もともと少々傍観者タイプの圭が自己紹介する。

その二人の手を、未麗は握手のように掴んだ。

「うん、よろしくね。誠弥君、圭君」

とニコニコしながらである。二人の頭の中は一瞬スパークしたが、それもすぐに我を取り戻し、ああ、うん、と返事する。かわいい少女に握手されて喜ばない男なんていないのである。

未麗が手を離れた瞬間、起衣璃がポニーテールを揺らしながら握手する。その瞬間に誠弥と圭は了斗を引っ張って教室の隅へ連れて行く。どうやら尋問のようだ。

「私は中山 起衣璃！ 普通に起衣璃でいいよ」

「うん、よろしくね起衣璃！」

「んで、あつちは平崎 香。彼女も普通でいいよ」

と、手っ取り早く友人の自己紹介をする起衣璃。それに応えてか香は未麗の手を握る。

「香です。よろしくお願いします」

その言葉には、友達が増えたという純粋な喜びが含まれていた。それを感じて未麗も気持ちがよくなる。

「うん、よろしくね！」

その間にも、了斗は二人に質問という名の尋問をしていた。幸いにも他のクラスメイトたちは寄って来ない。

（……で、彼女俺らのグループに入ってくれるのか？）

（一応、そう言ったけど。ダメか？）

（いや、僕達も彼女達もいいけど、どうやったの？）

（どうやったって、なにを？）

（……圭、コイツの“あれ”を忘れてた）

（……ああ、そうだったな。多分、どこかで二人きりになって君が

話を持ちかけたって、そんなところか？)

(ああ、そうだけど)

(……よし、戻るか。聞けることは聞いた)

正直、すばやく会話が終わったことに了斗は安堵していた。まさか“失踪事件の犯人は怪物で、彼女はそいつらを倒す力を持っていて、自分も持っているかもしれない”ということ話を話すわけには行かないからである。

しかし、彼らの言う“あれ”というものが分からない。しかしきつかけもないのに考えても分からないので、潔く思考を放棄して未麗達のところへと戻る。

「じゃあ、未麗はうちのグループってことで」

「決定です」

「よろしくね」

早くも息が合っている女性陣に、了斗だけならず誠弥や圭も驚いた。どうやら相性の良さは最高らしい。

そして始業を告げるチャイムが鳴った。いつも鳴るはずのそれが、了斗にはどこか別の始まりを告げるもののように思えた。

* * *

授業が終わり了斗、誠弥、圭、未麗、起衣璃、香は、校門を出るところだった。夕焼けによって様々な景色が昼の顔を赤く染めている。本来、このままどこぞへと寄り道をしたいところなのだが、

「今日は普通に帰らない？」

「そうです。未麗ちゃんもいるし、いろいろと教えてあげないと」

起衣璃と香の息のあった投合により、すぐさま『喋りながら帰宅』ということになった。

了斗の家は住宅街のほぼ中心の一軒家。そこを基準にすれば、誠弥の家は南よりの端っこにある古い屋敷（以外と名家である）。圭は東側のマンション。起衣璃は西側のマンション。香は圭と同じマンション。未麗に聞くと、

「連絡がついてから分かるようになってる」

ということらしい。了斗達には昨日はビル街の近くのホテルに泊まったと告げておく。

住宅、ビル、商店といっても、住宅にもビルにもデパートもあるし、商店街に住んでいる人もいる。だが商店街はいろいろと品揃えがいいことからそう呼ばれている。本類を買うためにはそこに行つたほうが当たるのである。

学校はビル街の商店寄りの方にあるため、ゆえに住宅街側から登校する場合はそれなりに苦労するのである。

五人は未麗に寄り道の場合、主にゲームセンターや複数のデパートを教える。わざわざ帰宅方向と逆の商店街に行くことは少ないので、そこは省く。そのせいでわりと話は早く済んだ。

「うん、華が一つ増えたことはうれしいものだな」

と誠弥は了斗と圭に言った。思わず了斗はなんでだ？ 聞き返す。

「一つより二つ、二つより三つだ」

「ふーん」

誠弥の力説に、しかし了斗は素っ気無い反応を返した。圭は苦笑気味である。誠弥はこの反応を予想していたが、やはり寂しいものがあつた。

未麗と起衣璃と香はわりと話が合うようでさっきからいろいろと話し込んでいる。盗み聞きは悪いかなと思いつ斗は彼女らに対してある程度聴覚調整を行う。しかし三人がこちらを見たのはなぜか。そのとき香が慌てふためいていたのがちょっとした印象である。

「……ふふつ、起衣璃が香の友達の原因が分かったよ」

「でしょ？ しっかりしてるくせにほっとけなくてさー」

「う、うう……」

その会話が妙に気になった。そのことを気にする暇もなく起衣璃が話題を持ちかける。

「未麗は、前に住んでいた友達とはメールでもしてるの？」

彼女にしてみれば、それはなんでもない、ただ未麗がどんな友達を持っていて、そこでどんな生活を聞きたかったのだ。

だが、少しばかり未麗は影を落とした。

「ううん……ちょっと事情があつてね、学校にもあんまり行けなかったの。だから、友達は貴方たちがはじめて」

「そう……なんだ」

少し重い答えに、場は気まずい沈黙にさらされる。これには未麗もしまったと思いフォローしようと思うものの、どう口にするばいいかわからない。

だから、彼がフォローする。

「いいんじゃないの？」

了斗は、空を見上げながら口にした。他の皆が彼を注目する。赤く映える彼の表情は、どこか引き込まれそうなものがあつた。

「俺達が始めての友達なら、過去の分なんて言わずに未来まで楽しくすればいいんだからさ」

それに対して、圭は、コイツらしいなと思い、誠弥と起衣璃は、言うねーと口を揃え、香はニコリと笑う。

想いを不器用に詰め込んだその言葉に、未麗は一瞬ポカンと呆け、はにかむような笑みを浮かべた。

「ありがとう！」

と、その言葉を口にしながら。
そして、六人は歩き始めた。

だから四人が止まるなんて了斗と未麗は思いもしなかった。

「……………！！ 混沌領域……！！」

「な、つまりそれって、ロストスピリッツがいるってことか！？」

「了斗君も感じたでしょ。この感覚はロストスピリッツが混沌領域を広げたっていう事実を」

確かに了斗は、まるで世界の一部を見えない氷水で覆うような悪寒を感じた。自分はそれに身震いをしたというのに、未麗は動じず何かの陣を組んでいる。おそらく慣れているのだろう。

「よし、これで……」

といい、彼女は宙に書いた魔方陣のようなものに力を吹き込む。いきなり青く輝き、その光は自分の友達を囲んだ。

「結界を作った。これで耐えられるはずだよ」

と彼女は言った。その瞬間に結界に入らなかった了斗は見た。

昨晚見た黒き体を。

それは半鳥人と、

虎と、

熊の、

三匹。

「……………」

彼女はわずかに眼を瞑り、次の瞬間見開いた瞬間に、了斗は彼女の雰囲気が変わっていることに気づいた。

それは、彼女の髪が煌きを帯びた。夕焼けの光ではない。それはまさに髪そのものが淡く光っていた。それが彼女が精霊魂の力を解放した証しだということがわかった。

そして、どこからともなく流星のような輝きとともに彼女の両手に銀銃が現れた。

「……エターナルノヴァ」

彼女はその銃の存在を確かめるようにその武器の名前を呟く。

そして、彼女は精霊魂と恩恵により向上した身体能力で走り出した。

——なんで低級がまだ太陽があるうちに……？ ……まさか！？

彼女の予感は当たっていた。

どこかで、彼女の敵が見ていた。

敵は、にやりと笑った。

e p i s o d e : f i r s t 《第三章》（前書き）

遅くなりましてすみませんでしたm（――）m

実は別の掲示板で別の作品を掛け持っているため、これからも遅くなります。

できるだけ長くお付き合い、よろしくおねがいします。

episode: first 《第三章》

誰かに知られない戦いを“選ばれた者”が繰り広げるのは

いい意味でも悪い意味でも誰かに知られたくな
いから闘うんだ

それが報われなく後悔しか生まな
いかも知れないと分かっている

それでは自分の“大切”も護りきれないか
もしれないとわかっていても

： 第三章

襲撃
：

いま十聖了斗は、普通に生きていたのならば会うはずのない事情に立ち会っていた。

目の前にいる、半鳥人と熊と虎。それは自分の知る現実にいるはずのない、ふたまわり程巨大で、動きが止まっている夕日により照らされているというのに、それはその色に染まるだけで、光が反映されない漆黒の身体。

そして恐怖を忘れている自分の横には、混沌領域により動きを静止されている四人の男女——自分の友人達は、“彼女”が張った青い魔方阵から発生されている円錐形の結界で身を守られている。

この領域内で自分が動けるのは、あの怪物——ロストスピリッツスピリットマンスターと闘うもの、精霊士の力の源、精霊魂を持つ適合者であるからだ。だが、それだけだ。動けるだけで、むしろ喰われたら即死亡と言う枷を付けられている。

そして、自分の前にはそれと闘う者がいた。

その少女——未麗は、夜空のような紺色の髪を煌かせて、精霊魂の力を解放した証しを見せている。さらに両手には銀色の銃“エターナルノヴァ”が握られている。すでに引き金に細い指が掛かっているため、臨戦態勢であることが分かった。

右手の銃をくると回して、後ろを見ないで彼女は告げる。

「了斗くん。もしかしたらあいつらは君を狙うかもしれない。そのときは一瞬でも時間を稼いだら助けてあげるから、死なないで頑張るって」

幼さの残る声には、学校の屋上で触れた感覚は無い。それは、すでに一人の戦士のものであり、戦死の価値観だ。しかしそれに了斗は怒気を覚えることは無い。それが仕方ないことだからだ。

「わかった」

殺意しか見えない遠吠えを雲の動かない赤い空に向けて吐きながら、三体のロスト・スピリッツは強靱な体を前に進めた。ゆっくりと歩くのは最初の一步だけ。次の一步では橋を蹴破らんとするほどの力で踏み出す。

半鳥人は前方から。熊と虎は左右ずつ。退路は後ろしかない。しかし下がった瞬間に了斗達がターゲットとなるかもしれない。

「ほっ！」

思考の後、未麗は上に飛んだ。常人ではありえない脚力のそれにより左右前から振り下ろされた爪は大きく空振りをする。相打ちを引き出さなかったことに未麗は小さく舌打ちをした。

「ギガアアッ！！」

半鳥人はすぐに気づいたらしく、言葉に取れない叫びを吐きながら、彼女を喰らいたいという欲望に押されるが如く彼女に向かう。

その浅はかな知恵は、

「御馳走・空中・動けない」

といった思考を生み出した。

だが、それは間違いだった。なぜならご馳走を狙った必殺の薙ぎが、空を切ったからである。

それに気づかない鳥人は、辺りを見回すその前に後ろから蹴り飛ばされた。認識できない鳥人は無様な姿で熊と虎を巻き込みながら叩きつけられる。

未だ安全圏に居る了斗は、青き翼を広げる天使を見た。

宙でバツク転をし、空中に滞空している未麗は、青い羽——否、水を圧縮して作られた翼を左右四枚ずつ広げていた。その翼は夕日に染まることは無く、母なる広大な海の如くの、何者にも侵されない深い青だった。

「……これが、私の能力の一部よ。了斗君」

「……水を操る……力」

頷いた瞬間には、未麗は纏れながらも立ち上がった闇の獣へと逆放物線を描きながら向かう。虎が彼女に飛び掛るが、

「じゃまー!!」

速度を緩めないでバツク転した、際どい角度で舞うスカートに気も払わない彼女のサマーソルトを腹にくらい情けなく地べたを這う。

だが虎が落ちるよりも早く、ゴッ、彼女は鳥人に二つの銃口を眉間に突きつけていた。

「ひとつ！」

一瞬の内に六発分の銃撃音。

それにより超人の頭は落としたスイカのように弾け飛び、水の翼を霧散させた未麗が着地した瞬間にはそれはボロリと崩れ落ち、黒い砂へと還る。

すぐさま同胞が消滅したことに気づいた熊は、彼女に向かってこん棒のような太い腕を薙いだ。

だがそれを予測してたのか、未麗は精霊魂スピリットオーラの開放により精霊気によって強化された回し蹴りを繰り出し、その腕を逆に加速された回し蹴りを繰り出し、その腕を逆に加速させる。言い直せば受け流す。

精霊気がまるで水流のように体を流れ瞬間を了斗が無意識に感じた瞬間には、それにより振るいすぎた熊はその巨体のバランスを崩し、致命的な隙をさらけ出した。それを見逃すはずもなく、まるで剣でしたから真つ二つにするかのごとく銃を振り上げた。銃弾も撃ちながら。

縦に一閃した銃弾を受けた熊も、崩れた音を立てながら砂へと還る。

「ふたつ！」

そしてすばやく振り返り、倒れこんでいるはずの虎を銃を向ける。
引き金が引けなかった。

すでに起き上がった虎は、力を発揮していない生まれのままの精
霊魂を感知したのか、了斗に狙いを定めてしまっていた。

「ガアアアアッ!!」

野生の雄叫びを上げたそのとき、未麗はようやく自分の侵した失
態に気づいた。どうしてとどめを刺しておかなかったのかと。しか
しそのときには猛スピードで了斗に迫っていた。その雄叫びだけで
すら、常人をへたれさせるためには十分な威力を持っていた。

なのにもかかわらず、ほとんど常人と変わらない、むしろ感覚が
優れているがゆえそれを直に受けやすい了斗は、しっかりと立って
いて、自らの命を喰らおうとする漆黒の化け物を見据える。

—— 護りたい。

その小さな、しかしゆえに強い想いがあった。自分の友達を護り
たい。ただそれだけでも。自分なんかヒーローになれるわけ無い。
本当はとても怖い。今すぐにも逃げ出したい。足が震えそうだ。
こんな化け物と関わりたくない。すぐに家に帰りたい。そんな自己
利益の感情が溢れそうになっている。

—— だけど ——

—— 誰かが傷つくところなんて、絶対に見たくない!! ——

ある程度使える力。そして普段以上にさえる脳内。さらに人が絶対に失ってはならない想いが、彼を奮い立たせる。自分の安否なんて彼の頭に無い。

次の瞬間には、虎は彼のどの仏に噛み付こうと顎を開き、飛びついていった。後ろでは了斗が対象となっていて銃撃できない未麗が見える。

——彼女を悲しませたくない！！

そう無意識に思ったと同時に、一瞬の内に身体を右に腰を捻る。虎はそんなのお構い無しに飛び掛ってくる。

「あああああああつ！！！」

その数瞬後には、虎は橋の上から消え、そこから真横に飛んでいた。

怒号とともに放たれた打撃は、見事虎の側頭部へとジャストミートした。大きく振り下ろしたままの了斗が無様に倒れた。しかしそれはどこか誇らしげに思えた。

彼は彼女の名を叫ぶ。

「未麗——！！！」

その声に弾かれたように、今まさに重力に引かれそうになっている虎に、未麗は双銃を構える。
少女は応えた。

「うん！」

刹那に放たれた無数の弾丸は一瞬で虎の腹を貫き、それは一塊の砂となりバシヤリと音を立てて川へ落ちた。

「は……はは……本気で死ぬかと思った……」

倒れた身体を起こしながら、了斗は少し狂った笑いをしているのは、修羅場を潜り抜けたゆえのものである。

「……あの、了斗君……？」

何故かおどおどしながら未麗が近づいてくる。その態度を気にしながらも了斗は

「なに？」

と応えようとした。

だが、その瞬間に、

——なんだ、これ……！？

彼は、とてつもなく大きな力が近づいてくるのを感じた。まるで忍ぶように、しかし確固たる目的と欲望を感じた。

彼の本能が、今までの人生最大の、常人では体験できないほどの警報を鳴らす。

その方向へと叫ぶ。

「誰だ!？」

突然のことに、未麗は身をすくませながら驚いた。彼女がそれを問いたださそうとする前に、

「くくく……君は特別みたいだね……」

眼で視認できるほどの密度がある風の衣がまるで何かを包み込むように繭を作る。

「……まさか!？」

一瞬で了斗に感じた違和感を頭の隅に押し込みながら、未麗は思い当たる情報を引き出そうとする。

その前に、“それ”は現れた。

白いタキシードに身を包み、軽くネクタイと首元を緩ませている

細面の男。否、青年というべきか。

外国人のようにシャープな、しかしどこか遊んでいそうな顔。長髪にした金髪に、緑色の眼。手も白い手袋で包まれており、白で統一された姿で肌が出ているのは顔だけだ。

それが肌と認識できるかは、疑問だが。

それは風に身を軽く浮かせている。不思議と彼自身は髪がなびいたり、服がはためくといった現象は起こらない。

その姿を見て、油断無く構えた未麗は呟いた。

「A - 3……ジルス」カルス」

浮かんでいる青年——否、ロストスピリッツはニヤリと口元をゆがめた。

「いかにも……私は“楔無き殺風”（くさびなきさつぷう）ジルス
「カルス。はじめまして、“銀翔の軌水”（ぎんしょうのきすい）、
アンソウン・アダプター
そして未確認適合者」

青年の形をした人ならざる者は、軽薄な笑みを浮かべながら腕を組んで了斗達を見下ろしている。

ただそれだけなのに、二人はどうしようもない威圧感に襲われる。了斗は虎に殺されかけたとき以上の冷や汗を流す。まるで抜き身の刀の剣先がのどに突きつけられているような感覚を覚えた。

それに臆せない未麗は、腰を低くした構えを取りながらジルス「カルスを睨みつけている。

「貴方だったのね……今の低級を操ってたのは」

その言葉に了斗はハツとした。本来、A以下のロストスピリッツは太陽があるうちは動けないのである。それなのに今は夕日が火の終わりを告げようと弱々しく光っている。弱々しいと言えど、そこには確かに光が存在している。そして未麗の言葉から導かれる答え。

この上級のロストスピリッツが媒体となつたとしか考えられない。

「ふふつ、さすがに君ほどの実力者となると低級では歯が立たないな」

「……まさかそっちの基本の錬朴れんぱくじゃなくて、紛いも無いロストスピリッツを操るなんて……やはり恩恵を授かったの？」

「ああ、“失われた目覚め”が起こり、私はこの能力を得た。おそらく他の者達もレベルを上げると様々な能力を得るのだろうな。私は最近になって能力が増えたところでね、とても機嫌がいいのだ」

「……とても嫌な展開ね」

「私達側ではこの上ないほど嬉しいことだな」

了斗の知らない世界で、抜群の緊迫感を表しながらの会話のなか、未麗は苦渋に満ちた表情を、ジルスは軽薄の笑みを深めている。そして唐突に彼は了斗へと視線を変える。

「くくく……まさか最小限にまで抑えた私の力に感づくとは……しかしそれも多少私側が近づかなきゃいけないみたいだな」

「十分よ。アンノウン私でも感じれないほど凝縮された力を感じるんだから。だから未確認なの？」

「そうだよ……くくつ……ハハハハハハ！　ハハハハハハ！」

心臓が握り締められるような緊張感の中、ジルスは狂ったように、右手を顔に押し当て哄笑した。了斗はそれを見て『世界一の宝を見つけたトレジャーハンター』と、どこか変に感じる比喻を思い浮かべた。——その宝が自分であることに気づいて、ただでさえ流れている冷や汗が余計に溢れてきた。

自分の思考を裏付けるように、哄笑の余韻を残しながら、興奮気味にジルスは了斗に視線を向ける。

「ハハハ……未確認の精霊魂は食えるとき不思議な感覚があるからね、これは楽しみだ……しかし残念ながら……それはお預けのようだ」

言葉の通り残念そうな表情、なんてものは欠片も出てない。三日月のように歪めたそれは、むしろ『楽しみの前に楽しみが増えた』といった種類の笑みだ。

「当然よ、私がそんなことをさせない。なんなら私が貴様を今この

場で消滅させるわ」

戦士としての表情を醸し出しながら、未麗は右手に持つ銃と刃に似た鋭い視線をジルスに向ける。しかしそんなことをせずとも、ジルスには今手を出すつもりは無かった。

鋭い視線に、敵は笑みで応えた。

「フフフ……まあ、簡単には手を出せないけど、そのスリルを楽しむのもまた乙だ……」

見た目は柔らかな視線を了斗に向ける。しかし了斗はそれに、抑えがたい禍々しい欲望が渦巻いていることに気づいた。異常なまでに集中された感情に、もはや身震いも起こらず、身体がコンクリート潰けにされたように固まってしまった。

「楽しみにしてるよ……フフフ……ハハハハハ……」

風とともに現れた敵は、風によって身を包み、風のようにどこかへ消えた。

了斗と、銀の双銃を光とともに霧散させた未麗が呆然としている中、混沌領域を包むベールのようなドームははがれ、覆われていた

世界は源たる世界と時間を共有する。

立ち止まっている二人を見て、誠弥は

「どうした？」

と声をかける。了斗達は

「なんでもない」

と少し無理矢理笑みを作りながら、友達のところへ合流した。

汗でべっとりとしたシャツの感触が、了斗を今居る現実へと帰した。

* * * *

「じゃ、また明日な」

この町では数少ない公園は、了斗の家を住宅街の中心——事実そうなのだが——と考えると、ややビル街よりのところにある。

ここが主な彼らのターニングポイントなのである。

了斗の別れの挨拶に、

「ああ」

「それじゃね」

とそれぞれ返し、誠弥は南に、起衣璃は西にある家、またはマンションに向かう。圭と香は変える地点がほぼ一緒なので東のマンションへと向かう。了斗は誰も知らない事情の後ともあり、人気の全く無い公園の、少し錆び付いた鎖で下げられたブランコに座っている。

未麗は、というと——

現在拠点にしているホテルには行かず、了斗の隣のブランコに座っている。ただのんびり掛けている了斗と違い、キイ、キイと音が大きめに響く程度にそれを揺らしていた。

そんな中、了斗は自分の中の葛藤の末に、ついに未麗に問いかけようとした。

だが、先手は未麗だった。

「ごめんね」

後悔と悔しさに満ちた表情で、ザザ、と靴を地面に擦らせブランコを止める。土煙がわずかに残る夕焼けに染まる。

「戦う前、

「死なないで頑張って」

なんて言っただけど、ホントは君に迷惑は掛からないようにするつもりだった。なのに、むしろサポートされちゃうなんて……」

「私は……何のために……」

と己の不甲斐なさに、下唇を噛む未麗。

そこで了斗は、彼女がジルス＝カルスが現れる直前におどおどと話しかけようとしたことを思い出した。それは、自分を危険な目に合わせたことを謝りたかったのだ。

苦笑した。そこまで自分なんて気遣わなくてもいいのに。

「いいよ。別に。結果的にはよかったんだ。それに俺だけだったら主達を護れなかった。ありがとう」

こっちが謝罪したというのに、お礼を言われるなんていうイレギュラーな事態に、ポカンと呆ける未麗。その表情に少々満足しつつ、

しかし了斗は表情を引き締める。

「じゃあ、教えてくれないか。俺が未確認と言われたこと。あのロストスピリッツのこと。“失われた目覚め”とか言うやつのことを」

その言葉により、未麗も表情を引き締める。それには幼さなんて欠片も残ってなかった。

「まず最初に……簡単に言うわ。貴方が未確認といわれた理由。それはアイツにすばやく感づいたから」

「それは未麗も同じじゃないか？ 精霊士なんだから一種の精霊の塊であるロストスピリッツくらい感じ取るくらいできるんだろ？」

眼をパチリと瞬きし、了斗は聞き返す。

「その通りなんだけどね」

と未麗は前髪を押し付けるように額に手を当てる。

「でもアイツは気配を限界まで消していて、実際ギリギリまで近づいてきたあの瞬間まで感じれなかった。それを君は感じたのよ」

……なんだって？ 恐らくこの世界のどこかにまだいるはずの適合者と同じように混沌領域を動くことしか出来ないはずの自分が、精霊士である未麗以上の感覚を持っているということか？

「……だからといって、私は君を無理矢理精霊士になれだなんて言わない。君の判断しだい」

「考えてみるよ」

と軽く了斗は返したが、内心は葛藤していた。

このまま何も見なかったことにするのか。

この力を誰かのために役立てるか。

どちらの道を進んでも、失い、得るものがある。

その思考の複雑さを察しながら、未麗は話を続ける。

「さっきの敵——ジルス＝カルスは、A-3のランクで、最近になってから名を上げてきたロストスピリッツなの」

「名を上げた……って？」

「アイツに立ち向かって生き延びたものはいない。資料によると低級のころからかなりの力を持っていたみたいよ」

信じられなかった。恐らく未麗と同じように、世界各地に散らばっている人間の中では最強であろう力を持つ精霊士が、倒すべきである敵に倒されていたなんて。

「……今のところどんな能力を持っているかは不明。でもかなりのの

強敵だわ。まさか同じロストスピリッツを鍊朴の代わりにするなんて……」

「鍊朴？」

「奴らが好みで作る下僕。だけどそれ以上にロストスピリッツは強いから、結果的に力のコストは上がるはず。かなりきついわ」

厄介な奴らしく、未麗は苦虫を噛み潰したような顔をする。了斗はあの細面の男にそんなに力があるなんて思えなかったが、しかしあちらの世界ではこちらの常識は通用しないと痛感した。

「最後に……失われた目覚め。これは何年前か前、正確には分かってないけど、何らかの現象が起こってロストスピリッツは急激に力をつけて、新しい能力を得るようになってしまった。ほとんど不明で何も分からず、その原因を知っているだろうロストスピリッツが何も話さないから、そう呼ばれている」

その事情そのものが苦痛のように言葉を吐く。了斗には未麗が何かに耐えているということを感じた。勘だが、それが彼女が精霊士になった理由にも繋がっている気がした。しかしそれに気づかないフリをするのが、“友達”として当然なものと感じた。

「それもせいでひっそりと続けられていた戦いは、今のようには表沙汰で行方不明者として目立つようになってる。その情報処理をするのに本部はかなりの苦勞をしているわ」

「……そうか」

「……………んじゃ、そろそろいこつか。遅くなるとまた襲われるかもしれないし」

ブランコから立ち上がった未麗は、先ほどの苦痛の雰囲気霧散させるように伸びをする。その雰囲気も、いまや元に戻っている。

「了斗君のお父さんとお母さんは？」

その当然であるべき質問に、何故か了斗は憧れに近い感情を向けられていることに気づいた。そのことを疑問に持ちながら答える。

「今海外で仕事してる。収入は結構いいらしいから、俺もこつやって一人暮らしできる」

「その言い方だと、すごく誇りに思っているんだね」

「まあ、そうだな」

率直な未麗の感想に、少し照れながら返す。
そして、そこで別れた。

＊ ＊ ＊

未麗と別れて数十分後、了斗は自宅の前に立っていた。白で彩られ、少し孤立したどこにでもあるような二階建ての一軒家が、今の彼にとってどこか彼を護ってくれる守護神のように見えた。非日常に半分足を踏み入れかけている少年にとって、日常の象徴は何よりも心安らぐところだった。

ここに来るまで自分はどうかすればいいのか葛藤していたためか、頭の中はぐちゃぐちゃである。その整理もかねて、彼は今この家の扉を開けた後すべきことを口にする。

「まず鍵を閉める。その後自分の部屋に行って服を着替えて、シャツや靴下を洗濯籠に入れる。宿題は無いから靴は机において、風呂を洗う。溜まる間はテレビ見るかゲームかギターで遊んで、あがったら夕飯を作る……後でなに作るか考えよう。食べた後は乾燥機に入っている水を捨てて洗濯物をたたんで皿を洗う。そのあとは……まあ自由時間の後就寝だな」

「一人なのに大変だね」

「まあ、もう慣れたけどな」

「それは感心だね」

「そりゃどうも」

どうも彼は落ち着きすぎたために、急に話しかけてきた声になんの違和感もなしに反応した。

「さて、入るか」

と言いながら、二つの鍵穴を慣れた手つきで開けて、その鍵を靴の外ポケットに入れる。そしてガチャリと扉を開けて、

「ただいまー」

誰も答える声が無い帰宅の癖を口にした後、

「お邪魔しまーす」

後ろから続いた声に、
ようやく気づいた。

「つていや誰!？」

鞆を放り投げ勢いよく振り返った了斗が見たのは、ベージュのハーフパンツに白いコottonの長袖といった軽装に、大きなボストンバッグを持った未麗だった。それは今にもバッグに振り回されるような錯覚をもたらした。

その大きなバッグを見て、了斗はしばらく思考停止した。未麗はその様子がおかしかったのか、クスクスと笑う。

「すぐくおもしろいね、了斗君って」

さらにニコニコ顔を彼に向けた瞬間に、了斗はようやくショートした思考に冷却装置を作動させることが出来た。

「な、なんでここにいるの？ ホテルに戻ったんじゃないの？」

だが少し冷却したくらいでは熱が収まるはずもなく、軽い混乱を起こしながら真っ先にすべき質問をする。

そして少し難しい表情をしながら未麗は答えた。

「本部に連絡を取って、いろいろと報告したらこうしろってさ」

「じつしろって、どうしろと？」

ようやく冷静に戻った了斗は、自分が予想している答えと違うものとなってくれと願った。

しかし、現実とはかが人間の思考に左右されないということが、彼はこの瞬間悟った。

「私を、この家にしばらく住ませてくれない？」

日常の象徴が、非日常という中々過激なスパイスを加えた瞬間であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9026a/>

SPIRIT SOUL

2010年10月9日03時09分発行